Japanese Association for Religious Studies

との裏返しでもある。養護児童は社会全体で取り組むべき問題であり、天理教という特殊な資源・資本をもつ者が抱え込み過ぎるというのは望ましくないのではなかろうか。言い換えれば、天理教里親がこれまでソーシャルキャピタルとしてたしかに機能しながらも、本来社会全体の問題としての養護児童の問題を抱え込んでしまうというところに、その社会的展開性（橋渡し型ソーシャルキャピタル bridging social capital として一般の人々へ開かれる側面）での弱さがあり、他方、社会の側も天理教に任せてしまうという一種の責任放棄につながるところがあったようにも思える。

しかしここに来て、二〇〇九年に制度化されたファミリーホーム事業（小規模住居型児童養育事業）の登場により、図らずもこの状況に根本的な変化が起こりつつある。ファミリーホーム事業は「生活し、家事育児すること自体が仕事」というフェミニスト経済学的に見て画期的な側面を有し、里親活動の社会的展開を促す契機となり得るからである。

「道の台」と天理教の女性

堀内みどり

天理教において「道の台」といえば女性を指すというほど、「女は道の台」は天理教の女性信者たちの信仰的在り方を表すことばとして知られている。二〇一二年の天理教婦人会総会において、真柱は「ぬくみ・つなぎの徳分を頂戴する女性の役割」や「女性的は資質、徳分という意味では、……いざなみのみこと、女雛型・苗代の理」について言及し、「育てること」の大切さを強調した。そして、婦人会創立のきっかけとなった「おさしづ」は、「男女の違いについて仰せになっているというよりは、『男女の隔て無い』（明治三一・三・二六）『男女の区別は無い』（同）などと、道のうえの働きにおいて、男に劣らず女もつとめ励むようにと仰せくださっている」とし、まだまだ女性の地位は低かった時代だったので、「お道の中でも、知らずしらずのうちにその影響を受け、婦人はとかく下積みの役割に甘んじて、表立った働きをしにくい傾向があったようにうかがえ」たが、「陽気ぐらしへの世の立て替えのためには、婦人の、男に劣らぬ働きが欠かせない」「そのよふぼくとしての心構え、働きがあってこそ、女性としての特質、徳分が十分に生かされるということができる」と説いている。さらに「男女の別はないというのは、道の台という言葉についてもいえることであります。……女だから道の台というのではありません。」と続けた。そして道の台というのは「元来、男女にかかわらず、堅固な信仰を持ち、どのような艱難不自由ななかでも、どうでもこうでもと先を楽しんで通り切ること、また、その人を意味している」「その違いを強調するよりも、男であれ女であれ、ようぼくとしての信仰を深める、実践することが根本で、その働きのうえに婦人の特性、徳分を生かすことだと思うのであります。その際にも、男女がお互いの特性を尊重し、たすけ合い補い合ってこそ、それぞれの徳分が十分に発揮されるということを忘れてはならない」と諭した（天理教婦人会第九四回総会　真柱様お話（要旨）「よふぼくとして信仰を深め実践することが根本」『みちのとも』二〇一二年六月号）。ここでは、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

講話直後に寄せられた「男も台なんですか」という婦人会員の問いをきっかけに「女は道の台」を再考したい。

天理教の女性信者にとって「女は道の台」と言われてきたが、それは「女は台」という教説となって定着した。端緒は婦人会が創設され、女性講師による巡回講演会が開催されるようになった時、永尾よしゑが「女は道の台」という題目で講演したことにあるとされる。これは、中山たまへ初代婦人会長が「女やからといつていつ迄も男にぶら下つて居るやうではならん。良人の光によつて光つて居るやうでは良人が居なくなれば光らんやらう、自分で光を出さねばならん」と諭したことがらが、「女であっても道の台になる」という自律的自覚として表現され、天理教の女性信者の在り方を示すことばとなったと考えられる。「道の台」は「おさしづ」の言葉で、その意味するところは真柱の講話にもある。しかしながら、時を経ると「女は台」と言い慣わされ、教団内での女性の在り方を示す用語のようになっていた。ただし、その内容は、機関誌で紹介される女性布教師の生涯を擁することであったが、一方では、時代が求める女性像に近いと思われる説き方もあった。「陰の力」「内助の功」という女性を評価する言葉の使用され、何より「台」が女性の特質や特性とともに語られてきたことが「男も台なんですか」という素朴な問いに繋がったと思われる。

個の社会の和様化

川上　光代

わが国は明治以後、欧米文化を導入し、ひたすら豊かさを求めて来た。その結果、戦後数十年で、高度経済成長を遂げることができた。しかし日本の社会は「個の社会」「無縁社会」となってしまった。日本の歴史を振り返れば、古墳時代から中国や朝鮮の文化を取り入れてきたが、必ずわが国独自の文化として発展させてきた。その後で新たな宗教や芸術が生まれている。「個の社会」も和様化しなくては、良き未来は訪れないであろう。

そこで「集(団)の社会」が残る農村部と「個の社会」となった都市部の民俗調査を基に考えてみた。まず農村部には血縁、地縁、家柄、信仰などに基づく大小の集団があり、一人の人が複数の集団に加入している。内、地縁大集団である「村」は、頂点に長老、底辺部に若者が位置する年齢階梯制の社会である。その社会は霊的世界にも反映している。村の構成員は生者も死者も個性をなくし、それぞれの世界の集合体になった。構成員同士は、固い絆で結ばれていたが、イリアイケンのない者や余所者に対しては排他的であった。村の排他的な性格は、構成員の結束力や共生の意識を強める結果となっている。村はどんなに貧しくても、人と人の繋がりでもっていた。

次に都市周辺の高度経済成長期に建設されたニュータウンでは、現在、独居老人や老老世帯が多い。例え働き盛りの家族が数人同居していても、別々の職場に勤めているため、家族間はバラバラで、個と個が同居している感じである。団地には自治会があり、相互扶助も行っているが、住民間の繋がりは薄い。家も地域も、「共同の作業場」でなく、「寝食の場」となった。共同の作業場である職場はというと、特に営業会社の場合、売

NII-Electronic Library Service